
牢屋と月明かりと僕

大蛇真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牢屋と月明かりと僕

【Nコード】

N5645I

【作者名】

大蛇真琴

【あらすじ】

1人の少年の残虐なる行為、その裏に隠された裁判の真実とは…
!

（前書き）

名無しの少女の思う頃に繋がる、前のステージ、過去の系列と考え
てくれば、この先の私の小説がよりいっそう面白くなるでしょう。

牢屋と月明かりと僕

著 大蛇 真琴

僕は二年前、罪を犯した。十六の時だ。

罪名は殺人。今は判決を待っている。一審では、僕は精神鑑定の結果、無罪だった。

当然の如く、検察は控訴。

そう、僕は擬似的な二重人格を持っている。

擬似的なと言う方が正しいだろう。記憶は共有している。だが、あつちの記憶はない。いや、眠ると同時に消しているのだろう。そして、嫌な日に嫌な時間に嫌な記憶を思い出させるのだ。

そして、今日も僕は牢屋の中で、月明かりの中、嫌な思い出を思い出させる。

「止めろ！僕を壊さないでくれ！」

悲痛な叫びはあちら側には、面白いようだ。より、強い衝撃を与えてくる。

壁に何度も頭を叩きつけ、自我を留めようとする。だが、柔らかな素材に変えられた壁には効果は無い。

刑務官は、もう慣れてしまったのだろう。俺に一蹴もせずに、別の部屋への見回りと向かう。

僕の額や唇には涙で溢れていた。

僕はあの悔やむに悔やみきれない事を思い出していた。

僕が殺してしまったのは、実の妹だった。

妹の首を足で押しつぶしたのだ。最初は息苦しかっただろう。でも、とめる事は出来なかった。なぜなら、あいつが生まれてから、僕には主導権と言うものが無かったからだった。

「お兄ちゃん」

妹の鈴が、花を持ってきてくれた。可愛らしいタンポポだ。

黄色のそれは、とても穏やかで華やかではないけれど、優しい色だった。

「お兄ちゃんみたいだね」

僕は頷く。けど、確証が持てないそれは現実になったのだ。

突然、耳が痛くなり、声が雑音のように嫌な音を響かせ、僕を襲ってきた。

街中で何度もそれが起きるようになってからある日の事。猫の死体を見た自分の顔を鏡で見て驚いた。…笑っていたのだ、不気味な程に。

それ以来、耳鳴りは収まった。が、他人と接する事をやめる様になったのだ。

それは、僕が正義と言うものを見失ったからだろう。

だから、僕は人と触れる事でその人を壊してしまうかもしれない。そう、予見していたのだ。

それでも、妹は僕を宥めて来てくれた。励ましに来てくれた。

…なのに僕は…、何故妹を殺してしまったんだ？

何故、とめる事が出来なかったんだ！

裁判中、僕はそれを主張した。けど、それを不快に思う人がいた。

…実の両親だ。

そのことから、僕の弁護士もあまり来なくなった。

それから、二審に入ろうとしている僕に、一人の弁護士が訪れた。

…意外にも若い女性だった。

名前は清水 愛さん。駆け出しの新人弁護士のようだが、僕を更生へと向かわせる事を色々としてくれている。

昨日もそうだった。

「愛さん、何故そこまで僕を励ましてくれるんですか？」

愛さんは自信気に言う。

「決まってるじゃない！了君を婚約者候補にするためよ！」

僕は少し黙って説教をすることにした。

「愛さん。百二十%分かる励ましの嘘を言わないでください」

愛さんは、テへと笑う。

「でも、了くんは、いい顔筋してるよ。私、彼氏いないからゲットしたい位だもん」

僕はため息をつく。

「何で、僕みたいな人を彼氏にするんですか…？大体、愛さんにも彼氏の一人二人…」

言い終わろうとした時、愛さんは強く言うのである。

「本気だよ！」

僕は驚いた。目が本当に本気だったからだ。

「えっ？」

「だって、君みたいな真っ直ぐな眼をして、悲しそうな顔をする子ほっとけないし…、私のタイプだから」

それからである。何か僕に力がわいてきた。暴力の力じゃなく、自分の意思を保とうとする力が。

僕はどうするべきか…考えた。そして、明日…。

「愛さん、本を持ってきてもらえませんか？」

彼女はすぐに答えた。

「いいよ？何々…もしかして、えっちい本？」

僕は真顔で答える。

「違います。…ちよっと欲しいけど…。そうじゃなくて！僕は被害者になったことが無いから、被害者の心境が分かりません。…だから、被害者から見た加害者への思いというのを知っておきたいんです！」

彼女はすごく驚いてた。そして、満面の笑みで答えたのだ。

「いいよ。…さすが、私の王子様だね」

僕は冗談にして、聞き流しておいた。彼女はそれを気にしたか、一言加える。

「えっちい本も持ってくるから」

「ダメですよ、十八歳未満だし…。それにそういうものは禁じられてるんですよ？」

愛さんは舌を鳴らす。残念そうだ。

「まあ…いいわ。んじゃ、もって来るね」

それから言うもの、僕は自由な時間を見つけては、本を読むことにしている。

「これから、神崎 了被告の二審を始めます。被告人は礼を」

僕は一礼をする。その中、被害者であり、実の両親でもある家族は、僕を一瞥した目で見る。

その場で僕は泣きそうになった。

「では、検察側。原告を述べてください」
低い声が裁判所に響く。

「神崎 了は、実の妹を殺したとして…」

一審では精神的な問題があるがゆえに、無罪となりましたが、新たな証拠があるとして、その証拠を元に、被告に死刑を求刑する次第であります」

…死刑。その言葉に、観覧席がどよめく。

記者は急いで、外に出ている。恐らく、報道で速報するつもりなのだろう。

僕も意外だった。一審で求刑された時より重い。

しかし、僕を殺したい気持ちは分かる。僕の父は国会議員で、母は秘書。政界の派閥のドンだからだ。

愛さんは、勢いよく手を上げた。反論を言うのだろう。

「検察に問います。何故、今になって求刑を重くしたのでしょうか

？被告はまだ未成年であり、更生の余地は十分にあると思いますか？」

検察は静かに低い声で言う。

「被告は、精密検査の結果、以前癌だと言う申告が医師からありました。ですから、癌の末期患者は、結果的に一緒と考え、死刑と言う求刑をしたという経緯にあたる次第であります」

…ん？ちよつと待て、精密検査？僕はそんなことした覚えないぞ？

僕は目で愛さんにサインを送る。

「ですが…、その証拠はどこにあるのでしょうか？被告はその覚えが無いといっておりますが？」

検察は無言の会話に驚いたようだ。

「…あります。その証拠はこれです」

裁判中に提出されたそれは、三年前の十月、カルテには肝臓癌と書かれていた。

「反論はございますか？」

難しい事はサインを送れず、僕が手を上げる羽目になった。

「裁判長。その日は、僕は中学の部活をしていました」

裁判長は疑問を検察側に問いかける。

「と言っております、検察側。それは正しい証拠なのですか？」

検察側は予想外の人物を証人として出してきた。それは、二人だった。

一人目は母だった。

「了は朝早くから具合が悪く、その日は欠席して病院に連れて行きました。学校の担任からも確認は取れておりますので、間違いはありません」

以上だった。そんなことがあるはずはない。三年前はまだ正常だった。だから記憶も僕の管理下にある。だから、その日は確かなものだった。

「そんなはずは無い…！僕はその日は学校に」

裁判官の声が響く。

「静粛に。では、二人目の証人、前へ」

二人目の証人。それは、1審中の弁護士だった。

「被告人は凄く精神病で衰弱していると言いましたが、あれは本人からの出まかせでした」

僕は、驚く。あれほど僕を弁護した人間がこうも簡単に裏切ったのだ。確かに精神鑑定を受けた。で、結果はうつによる神経的疲労と、強迫観念からでる心の衝動から、と言うものだったはずだ。

要するに、妹が僕のことを殺そうとして、死にたくないという強迫観念から妹を殺した。そういう結果だ。

「被告人は、精神疾患があるように見せ、審議の詐取を行なおうとしました。ですが、私は遺憾にその行動を知りつつも、本人の意向で行い、1審で間違った判決を下された事を誠に反省しております」
愛さんは、手を上げる。

「石田弁護士に問います。貴方は現職を辞する意向で言いましたね？」

石田弁護士は頷く。

「そのつもりです。その事について、何か？」

力ある答えだった。何かがおかしいと気づいたのは、愛さんもわかったようだ。

「愛さん、どうでしょうか？」

愛さんは苦笑する。

「そうね…、そう来るなら…。でも、私だけじゃ無理かな…」

私だけじゃ無理と言うのはどういう事だろうか。何か心のうちを秘めているようだか…。

「わかった、先輩達に相談してみるわ」

「誰の事ですか？」

愛さんは真剣な顔でいう。

「…昔。って言っても、五年ぐらい前なんだけど、ジャッカルっていうゲリラ報道の集団組織があったんだけどね。それが、国の

腐敗さを報道してから、組織の集団を暗殺するようになったのよ」
ジャッカル、聞いた事がある。

兵士でありながら、戦場で数々の国の腐敗さを撮影し、全世界から追われることになったと言われる、軍政革命の兵士達の部隊、総称ジャッカル。

死を司る神官、名をジャッカルと言った、エジプトの伝説に残る、ミイラの作り手達である。

それをモチーフにしたのは、訳があつた。第二次世界大戦から、行なわれてきた、アメリカの核実験などを公表し、世界を震撼させたのも、この部隊の情報漏えいからという報道が流れているからであつた。

「私は、その部隊の候補生だつた。けど、辞めた。それは、部隊長からの言葉だつたわ。『自分を改め、そして見つめなおす事に人生を使いなさい。そして、君は人を殺せるような人間にはなつてはいけない。』ってね」

愛さんは涙を流す。

「それからだつた。私が居なくなつてから、彼らは死んでつた。そして、ジャッカルの元団員は四人しか居なくなつてしまつた」

僕は、何を語ればいいのだろう？僕は、犯罪者だ。だから、何も声を掛けられない。けど、一つだけいえることがある。

「大丈夫、僕は死んでも愛さんの心の中で生きるから。ジャッカルの皆もそうだよ」

愛さんは、ハッとする。その言葉の意味が分かつたのだろう。悟れたのだろう。

愛さんは涙を拭き、現実に戻つてきた。

「叙情酌量人、前へ」

現れたのは、ごく普通のスーツ姿の男だった。ただ、眼光は鋭く、裁判官さえも意気を飲む人物だった。

「裁判官、この男が本当に酌量人なんですか!？」

検察は怯えているようだった。

「よお、また厄介になるぜ？」

少し間を置き、裁判官は男に名前を問う。

「秋雨 勇次。私立探偵をやっている」

「本件とはどういう経緯で来たのですか？」

裁判官は、重い口調で言う。

「まあ、マスコミには事前配りの、資料を持ってきたんだがね。事件のね」

そうだ、今日は観客席にいる人がやけにメモを取っている。

「そして、この裁判の内容は盗聴されてる」

記者たちはざわめく。一斉に出ようとするが、扉は開かない。

「この部屋に通じる扉はすべて開かなくした。しかも、この音声は、全世界に放送中だ。しかも、変換コンピューターのおかげで、全世界八十%の人間が聞いている、一大イベントさ」

裁判官は驚く。勿論、僕も驚いた。例の人たちがここまですごい事をするとは思わなかった。

「まず、第一に。ここにいる裁判官、マスメディアの一部、そして、検察と一審の被告人。こいつらは、加害者であり、被害者の父親でもある神崎 直人氏による裏金の口座残高報告書。これは、ネットで見れるようにしてあるし、中国、アメリカ、ロシアなどのメディアにも、翻訳して送ってある」

男はさらに追及の手口を止めない。

だが、あることが疑問によぎっていた。

…父親？母親は？

「第二に、自称実の母親である神崎 輝代氏は、十八歳の時に、子宮ガンで子宮を切除しており、事実子供が産めなかった。つまり、愛人との子供を実の子として申請している。これは、直人氏の父、修氏による裏金で成立していた、虚偽妊娠なのである」

これには思わず、愛さんも驚いたようだ。

「そして、少年には一審の医師の判断にセカンドオピニオンにより、診断は確定的になった。以上だ」

そういうと、男は足早に天井口から逃げていった。

「裁判長、これらの証言は正しく判断されるべきではないでしょうか？」

裁判長は、しかめっ面をしていた。何しろ、自分たちの不正が明らかになったからだ。

「裁判長！」

激しく怒鳴ったのは僕のほうだ。

「愛さん、僕はもういいんです。全てを知った上で僕は死ねるんです。それ以外に幸福はあり得ません」

僕は力を込めていった。

「僕を死刑にしてください」

…そうして、僕は死を迎えた。

…けれど。

そう、俺は生きていた。ここは病院だ

しかし、肌の色が違う。病院にいた割りには、肌が黒い。

そう、俺は黒人として再び生を受けた。

…いや、俺が宿主を殺した上で、新たな肉体の宿主をも殺したのだ。

そして、4月、俺は日本へと舞い戻り、あの男の目の前でこういつた。

「気をつける、俺らはどうやら何かの予兆に用意された代物らしい。どうやら…これから、お前らは過酷な運命を背負うことになるだろう」

…と。

そして、俺も次のステージまで消息を絶っていた。

了

（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5645i/>

牢屋と月明かりと僕

2010年10月8日15時20分発行